

# ふれる日本の コンテンツ

日本文学、アニメ、映画のリメイクと、日本のコンテンツが今、人気だ。「少年ジャンプ」を発行するヴィズLLC、日本の英訳小説を発行するパーティカル社に、刊行に至るまでの話を聞いた。

## 小説 日本の現代文学を英語に翻訳して出版

鈴木光司、北方謙三、栗本薫、江國香織ら、日本のエンターテインメント作家の作品が、昨年、英語に翻訳されて米国デビューを果たした。

出版元のパーティカル社は、日経新聞社で書籍編集者として企画編集に携わった経験を持つ酒井弘樹氏（41）が01年、日本の現代小説や漫画を翻訳する出版社としてニューヨークで設立した。

「日本の現代文学は、村上春樹や吉本ばななだけじゃない。日本のエンターテインメント文学を、広く米国人に知って欲しい」との思いを抱き、98年渡米。しかし、翻訳者の選択や、翻訳文の質の壁にぶち当たった。



イオアニス・メンザス

長。米比較文学士。72年、兵庫県生まれ。大阪大学文学部卒業。2002年、パーティカル社に入社。

試行錯誤をしているときに、

現在編集長を務めるイオアニス・メンザス氏（31）と出会った。日系ギリシャ人の彼は高校までを日本で過ごし、米プリンストン大学で比較文学を学び、コロンビア大学で英語学修士号取得。日本文学に造りが深く、日米文化の違いにも通じる。彼の参入で高いレベルでの編集ができること確信し、自ら出版社を起ころと決心した。

昨年4月、第1号に鈴木光

司の「リング」(英語タイトル「RING」)を刊行。続いて、江國香織「きらきらひかる」(Twinkle Twinkle)、北方謙三「棒の哀しみ」(Ashes)、栗本薫「グイン・サーガ」(THE GUIN SAGA)、手塚治虫の漫画「ブッダ」(BUDDHA)、田口ランディ「コンセント」(OUTLET)。初版

はいずれも1万部。すでに増刷した本もある。

作品選択の基準となるのは「作品の構成力だ」とメンザス氏は言う。「重要なのは日本の知名度ではなく、米国で受けるかがポイント。構成力があるものは翻訳しても異文化の中で普遍性がある」

米国にはホラー・ファンが多いことから翻訳本の第1号となったのが「Ring」。「リング」はJホラー(ジャパニーズ・ホラー)とも呼ばれ、すでにリメイク版がハリウッドで映画化されてもいた。

もうひとつ同社にとって大きな力となったのが、米出版界では装丁の第一人者として名高いチップ・キッド氏がアートディレクターとして加わったことだ。彼は人気作家の作品など1500以上の本の装丁をデザインしている超売れっ子デザイナー。そんな彼

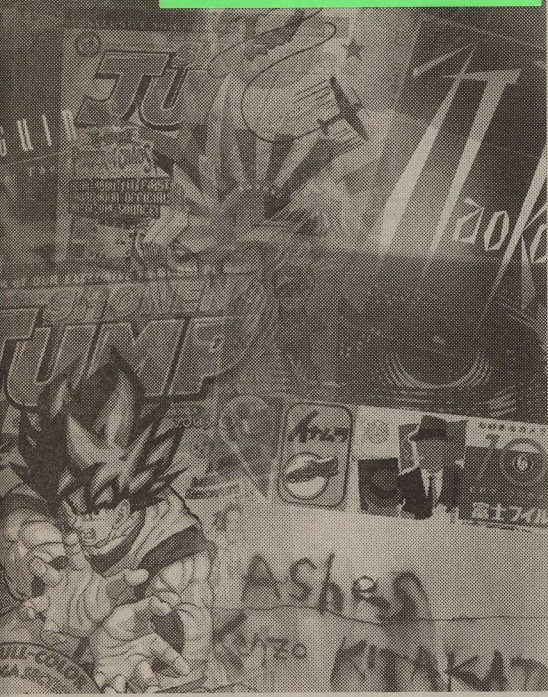
が新参の出版社の仕事を引き受けてくれたのは、手塚治虫のファンだったからとか。手塚治虫の「ブッダ」の翻訳の計画を話したら二つ返事で引き受けてくれた。

今年、春にミステリー作家・東野圭吾さんの「秘密」(英語タイトルは「Naoko」)そして児童文学の長編、灰谷健次郎さんの「兎の目」(ARabbit's Eye)、高橋源一郎「さようなら、ギャングたち」(Sayonara, Gangsters)、グイン・サーガ」と「ブッダ」の続編など、20冊の刊行を予定している。

日本では著名な作家も米国では新人だ。爆発的に売れるのはまだ難しいが、「我々がいたいと思うものを継続して出していくことが目標。出版した本が映画やテレビ、ゲームなどに展開できれば大きなビジネスになる。すでに問い合わせもある」と酒井氏は意気込んでいる。

(文・石黒おる、写真・木内海)

2/1/2004 Vertical (Asahi)



酒井弘樹

パーティカル社社長。62年、愛媛県生まれ。中央大学法学部法律学科卒業。日本経済新聞社、日経BP社勤務を経て、98年渡米。01年パーティカル社設立。

何が米国に受け入れられる？